

聖霊降臨後第11主日(特定17) 2011/8/28

聖マタイ福音書第16章21節～27節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

先週は、イエスさまが弟子たちに、「あなたがたはわたしのことを何者だと言うのか」とお尋ねになり、それに対してペトロが、「あなたは、メシア、生ける神の子です」と答えた物語を読みました。その答えを聞いて、イエスさまは、「バルヨナ・シモン、汝は幸福(さいわい)なり。汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり」と言ってペトロを祝福されました。

イエスさまをメシア、救い主、キリストと告白することができるのは、人間の知恵や経験に基づくものではありません。父なる神さまが聖霊を通して働いてくださる時に、初めて信仰の告白がなされるのです。信仰は神さまの導きなくして与えられることはありません。その聖霊の働きにあずかったペトロの幸せを、イエスさまも喜ばれて心から祝福されたのでした。

パウロも、「聖霊によらなければ、だれも、『イエスは主である』とは言えない」と言っていますが(I コリント12:3)、この時、ペトロに聖霊が働いたことは確かなことです。たとえその信仰告白が、後ほど触れますように、メシアに対する人間的な思いを含んでいたとしても、聖霊の働きを否定することはできません。教会はこの地上に存在し続ける限り、神さまの事柄を思う心と人間的な関心とが、常に入り混じりながら信仰生活を送っていくのです。

さて、ペトロの信仰告白の物語に続く今日の箇所では、一転して、イエスさまはペトロを厳しく叱責しておられます。それも「サタン」と呼んでいます。「誘惑者」(フランシスコ会訳)、「私の躓きだ」、「私の後ろに失せろ」(岩波訳)と激しい言葉を重ねてペトロを退けています。

イエスさまを、「あなたはキリスト」と正しく告白したペトロです。そればかりではありません。「あなたはペトロ」とイエスさまから新しい名前をいただいたのです。ペトロと言う名前

は「岩」を意味します。「この岩の上にわたしの教会を建てよ」と言って天国の鍵まで授けられたのです。そのペトロが、今度は、「サタン」と悪魔呼ばわりされてしまったのです。

何故でしょうか。ペトロがイエスさまの進んで行く道の前に立ちただかって、行く手を妨げようとしたからです。

ペトロの信仰告白をきっかけとして、イエスさまは、それまでは語ることをしなかったご自分の使命が、どのようなものであるかを、弟子たちに打ち明け始められました。イエスさまの宣教の新たな段階がここから始まることとなります。

「エルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている。」これがイエスさまの行くべき道です。しかも、その使命は、神さまによって定められたご計画であること、必ず実現されなければならない運命にあることをはっきりと示されました。

このイエスさまのみ言葉は、ペトロにとって大きな衝撃であったに違いありません。ペトロにとっては、イエスさまが当時のユダヤ教の自治機関であった最高法院のメンバーによって捕らえられ、苦しみを受け、殺されてしまうなどということは、あってはならないことでした。何故なら、イエスさまは、ペトロが告白したようにメシア、救い主なのです。救い主は異教徒に支配されている神の民イスラエルを解放し、ユダヤ民族に幸せな暮らしをもたらす存在として待ち望まれ、期待を集めていました。それなのに、イエスさまは、ご自分は死ぬメシアであると語るのです。

イエスさまの言葉は、ペトロの理解を遥かに超えたものでありました。それで、イエスさまを密かに脇へ引っ張って行って、ペトロが叱ったのです。「そんなことがあなたに決して起こってはなりません」(詳訳聖書)と言って、イエスさまを厳しく咎めたのです。非難して責めたのです。決して悪意からではなかったでしょう。いや、むしろイスラエルの期待を担った忠告であったでしょう。イスラエルの熱い望みを代弁したのです。

そのペトロの言葉の中に、イエスさまは、宣教を開始される前に荒れ野で対決し退けた悪魔の囁きを聞き取りました。「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」

「神のことを思わず、人間のことを思う。」それはどのようなことでしょうか。

話は変わりますが、カトリックの作家で重兼芳子という方がおられます。その作品の中に『闇をてらす足音——岩下壮一と神山復生病院物語』という小説があります。御殿場にありますがカトリック系の救癩施設とそこの6代目の院長を務めた岩下壮一神父をモデルにした物語です。

岩下神父は東京帝国大学の哲学科を出て鹿児島第七高等学校の教授になり、その後、ヨーロッパに留学して学んだ秀才です。とびつきり有能な学者でした。百年に一度出るか出ないかといわれるほどの碩学だったと言われます。学問の道をそのまま行ったら、その分野でも大きな業績を上げたに違いありません。この留学中に志を立て、神父になります。

ヨーロッパから帰国してからは東京大神学校で教えたり、東京帝大にカトリック研究会を創って学生の指導に当たったりしていました。今、信濃町にある新生会館も、もともと岩下神父の建てた学生寮から出発しています。当然のように学者的な司祭の道を順当に進んで行くだらうと思われていました。

その岩下神父が、神山復生病院の前院長の死去に伴い、管区長の命令によって後任者として赴任します。当時、この施設の後任人事は難航するだろうと予想されていましたが、前院長の逝去後、たった二日で決まったそうです。カトリック教会の中では、ハンセン病の病院の院長という仕事は、当時の神父の仕事の中でこれより下の役はないと言われていた程度のものでした。

岩下神父が何故、将来を約束され、また、囑望されていた学問の世界から救癩施設に身を投じることになったのか。それは父親の急逝という出来事が契機となりました。父の清周は聖公会の信徒でしたが、関西の実業家として成功し、衆議院議員も務めたことのある人でした。頭取をしていた銀行の不正融資事件で背任・横領の罪で有罪となり、引退して御殿場に移り住んでいました。そのために清周は神山復生病院を支援するようになり、その意志が壮一神父にも受け継がれて行きました。

また壮一神父は、亡き父の非を償うために社会に奉仕をしたいという強い決意を抱いていました。父の罪を代わって償うこと、そのためには自分を犠牲にして、生涯、心身を神に捧げ、また、国家国民の福利のために最善の力を尽くしたいという強い思いがあり、父の遺志を継げることを喜ぶようにして赴任したのでした。（輪倉一広氏の論文を参照した。）

就任に際し、次のような祈りを捧げました。「主イエズス・キリスト、主は病める者悩める者を特に癒し、これを慰め癒し給いしにより、われその御跡を慕い、ここに病人の回復、憂き人の慰めなる聖母マリアの御助けによりて、わが身を病者の奉仕に献げ奉る。希わくばこの決心を祝し、末ながくこの病院に働く恵みを与え給え」と祈りました。この祈りそのままに、生涯を捧げて生きたのです。一身を賭して患者たちの「おやじ」となって尽くしたのです。

岩下神父は、実業家として成功した父親の遺産を、病院のために惜しまずつぎ込みました。それは、「癩者の友となれ」という父親の遺訓に従うことでもありました。

また、自分の弱さをさらけ出すことにも、ためらうことがありませんでした。ある時、トイレで自分の腕にハンセン病の徴候を示す赤くて丸い斑紋を見つけ、背筋が凍るような恐怖に立ちつくしたと、小説にはあります。それは、実は天井の節穴から漏れた光がそのように見せただけのことでした。日頃から患者さんを兄弟と呼んだり愛を口にしている神父として、そのうろたえようを、どれほど恥ずかしく思ったか、正直に告白したことが描かれています。

イエスさまはペトロに対して、「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と指摘されました。神のことを思う。そこにわたしたちの思いを集中することができれば、どれほど幸せなことでしょう。その幸せをどのようにして獲得できるのでしょうか。それは、「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」というイエスさまのみ言葉を聞くことの中にあります。わたしたち一人一人の自分の十字架は神さまによって既に定められ備えられています。自分自身に関心を寄せることを中断して、そこから眼差しをイエスさまに注ぐのです。その時に、自分の十字架が見えて来ます。

しかし、それを担うにはあまりにも弱い自分でしかないかもしれません。ためらいばかりが心に生まれ、勇気もわかずに、そこから逃げ出したいという誘惑に襲われます。しかし、その弱さの中にイエスさまは来てくださいます。神さまの御心と人間の思いが激しくぶつかり合うそのただ中に、イエスさまは十字架を立ててくださったからです。十字架は、わたしたちの弱さをも祝福してくださるしるしです。そして、そこからイエスさまに従って行く信仰へと導かれていくのではないのでしょうか。